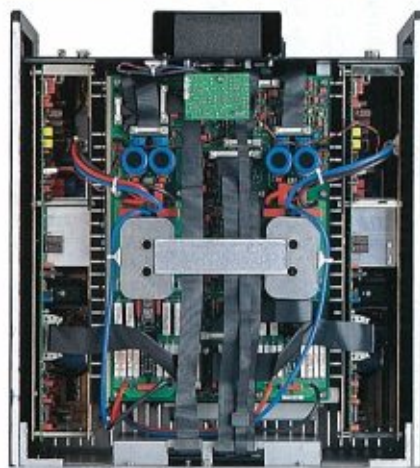


エキサイティングコンポーネント EXCITING COMPONENTS



プリアンプ720の内部。リアパネル側に配された増幅部は左右独立し、上下2段のモノラル構成。最上段に載っている小型の基板は、MC専用フォノコライザー基板。入力はフォノ1系統を含むアンバランス4系統とバランス2系統。出力はアンバランス、バランスをそれぞれ1系統装備する。増幅部を取り囲むようにL字型に配置された電源部はシールド板を介して配置。コントロール系と増幅系は電気的にも物理的にも完全に分離されており、アンプ回路用の電源はリニア電源回路、デジタル・コントロール回路用はスイッチング電源回路という組合せである。



ステレオパワーアンプ710の天板を外して内部を見る。電源部を中央に、左右にアンプブロックを配置。電源回路の下にはスチールカバーで磁気シールドした1,000VAの容量を持つ電源トランスを左右独立で本体前後方向に搭載。出力段は14個のバイポーラトランジスターからなり、6mm厚の銅板を介してシャーシ下部に取り付けられている。

まささに啞然。弾力性に満ちた躍動感

柳沢功力

体も重要なアンプ技法の一つとのコンセプトに基づいて設計された、堅牢で電磁シールド性にも優れたものがある。しかも表面にネジがまったく見えない手の込んだ設計で、このデザインは07年度のドイツ・レッドドット・デザイン賞を獲得とのことだが、このため、試聴時に簡単に蓋を開けて中を見ることができなかったわけだ。

プリアンプ720は特徴として、第1にオーディオ回路用と

デジタル・コントロール回路用の電源独立。及びデジタルノイズによるアナログ回路への干渉を、皆無に等しいまで抑えていることや、オーディオ用電源の負荷変動や残留リップルを究極まで抑えた、高い安定度を掲げているなどに、現代機らしい設計姿勢を感じさせる。

試聴時には見られなかった内部は、L/R独立の大規模基板が上下に2段階重ねられ、さらにその上に内蔵のフォノ

回路基板を重ねた3段構造。これにより110dBのセパレーション特性や、最大3Aの電流供給を可能にする、2Ωの低インピーダンス出力を実現しているとのこと。またヴォリュームは金属皮膜抵抗の組合せをリレーで切り替える方式だが、これと並列に音量設定時のみ動作するPGAアンプを挿入し、リレーの動作音を排除するなど、高級機らしいこまやかなセンスも窺わせている。

いっぽうパワーアンプ910は、1,000VAの大容量トロードラトランス2基が土台のように鎮座し、さらに総容量25万μFに及ぶコンデンサーを搭載。出力段は6mm厚の銅板に固定されたch当り14個のバイポ

ラTrによる、7パラレルPP構成。また従来のNFB回路とは異なる独自のリニア補正回路を、入力バッファと電圧増幅段の間に挿入することにより、多量の負帰還に頼らずとも、限りなく原音に近い音質を実現しているとのことだ。

柔軟な質感とゆとりある音の膨らみ

プリアンプにもパワーアンプにも共通して言える魅力的な特徴は、何よりも質感の柔軟さとゆとりある音の膨らみ。加えてプリアンプは繊細なタッチや濃やかな表現力に優れ、同時に凛とした一面も備えるなど、その表情の豊かさには格別なものがある。またパワーアンプでは、響きが軽やかで、けっしてこけおどしの凄味など感じさせないのだが、それでいて実に悠々のダイナミック感とスケール感でリスナーを魅了。

さらにこの2機種の組合せが、信じ難いばかりの相乗効果を発揮する。それは見事に波長が合致したとでも言うか、音場空間が格段に緻密さを増し、ひとつ一つの音像が生気と弾力性に満ちて躍動。まささに啞然とさせられるばかりだった。